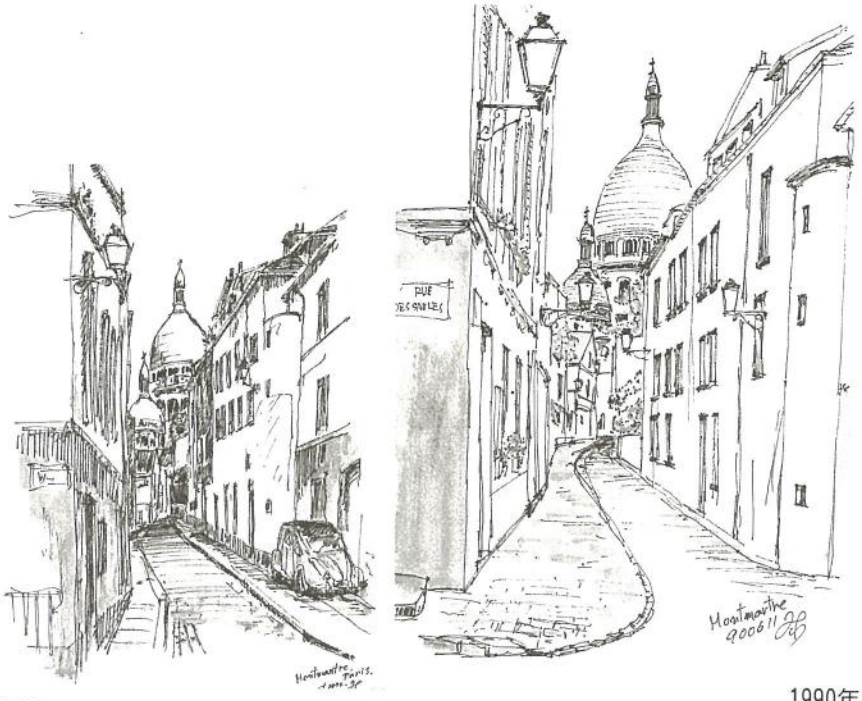
No.43　　1990年９月１日

アルパック ニュースレター

地域計画・建築研究所



1972年　　1990年

18年間全くかわっていないパリ・モンマルトルの風景（スケッチ　三輪）

アルパック　ニュースレター　もくじ

特集「今、日本の外では……」

・普段着の国際交流…… 2
・ロッテワールドに見る総合ＳＣの行方…… 5
・欧州河川港都市の風景…… 8
・チェンマイを旅して……11
・第13回全国町並みゼミ京都大会を終えて……13
・オートキャンプ体験記……13
・土木技術者女性の会について……14
・新刊旧刊書評紹介……15
・まちかど……16

NO. 43

普段着の国際交流

代表取締役会長　三　輪　泰　司

6月2日から13日まで、京都経済同友会の「東欧とＥＣ市場視察団」の一員に加えて頂いて、ＥＣやＯＥＣＤの本部などを訪問し、ついでにベルリンまで足を伸ばしてきました。

その内容は、いずれ同友会の報告書に書かねばなりませんので、ここではちょっと違った国際交流のお話をしてみたいと思います。

よく知らないヨーロッパ

ヨーロッパのことを知っているつもりで、実はよく知らないことにまず気付きました。

アメリカの州の名前を上げてみよと言われたら、たちどころに20くらいは言えますが、今注目の西ドイツの州は？ときかれても、まぁバイエルンくらいしか出てこない。それでいて、ヨーロッパはいまや斜陽だとか、えらそうに批評していたのです。

もっとも、この地球上の人間の生活様式の違いはたいへんなもので「なるほどザワールド」型のテレビクイズのネタが、よく続くものだと感心するくらい尽きないわけです。

一方、日本の「国際化」はすさまじく、海外旅行や企業の進出も目覚ましいものです。

外国を見、或いは外国人との付き合いを経験している日本人が、急速に増えているということです。もっとも、この方面でも、日本人はすぐに群れをなして、その国の地域社会に溶け込まないということもよく聞きます。

そこで「溶け込んで行く」若者達のことをお話ししましょう。

“若い使節”達のために

3年間、ロータリーの地区国際青少年交換委員長を務めさせてもらって、いささか外国の人々とのお付き合いができました。

このプログラムで、地区委員会の仕事とは、要するに高校生レベルの若者を、1年間派遣し、受け入れる「交換」のお手伝いをすることです。高校生ですから高校へ入り、未成年ですからホームスティします。1年間ですから、観光ビザではなく就学ビザが必要です。

それに、これは単なる留学ではありません。

“若い使節” Youth Ambassador といっていますように、自国を代表して、国際理解と友好に貢献することを要請されています。

1年間、ホストファミリーの一員となって生活を共にすることで、旅行者としてサーッと見てきただけでは判らないことを、一杯経験します。高校は大都会だけでなく、津々浦々にありますから、日本人など見たこともない、或いはガイジンなど他にいない、町や村で、そこの人々と同じ暮らしを体験します。

ハックルベリー・フィンのように、ミシシッピー川を、筏で1週間かかって下るツアーをしたり、子牛を一頭貰って、1年間がかりで育てたりしてきます。オーストラリアでは水飢饉で、羊がばたばた死んでいく光景を見たりします。力を合わせて困難を越えること、自然と生命の素晴らしさ、尊さを身体で学んだと報告する彼らもまた素晴らしく成長してきます。

勿論、戦争を知らない世代です。ダーウィンへ行った女の子は、ホストのお父さんから帰りの飛行機の中で読むようにと手紙をもらいました。“貴女のおかげで町の人々は日本人への見方を変えることができてありがとう”と書いてありました。

これも女の子でしたが、ペンシルバニアの

片田舎で1年過ごし、最後のファミリーから家の鍵を頂き“貴女はうちの子です。いつでも帰っておいで”と言われました。お土産は小さい鍵一つでしたが、彼女はペンダントにして、いつも肌身放さずに持っています。

国際化とはなんだということを、若い彼らから、私達が教わっているのです。

ロンドンにいる息子

10年前、我が家で一緒に暮らした男の子－ジェレミー君はいまロンドンにいます。

彼はオーストラリア人でしたがイギリス国籍も持っているので、京都市立日吉ケ丘高校を終え、西オーストラリア大学を卒業して、今シティに本社のあるウィリアム・ドブローという証券会社に勤めています。日本語の勉強を続けていたので、重宝がられています。

もう立派なジェントルマンです。

ロンドンから「お父さん、日本へ出張で行きます。部長さんと一緒です。うちに泊まってもいいですか」と電話してきます。

6月2日、ロンドンに着いた日、ホテルへ来てくれました。

ポロという小さい車に乗っています。あの可愛くて、不器用なジェレミーが自動車を運転するようになったかと、感無量でした。

我が家には娘しかいないものですから、息子がロンドンにいるというのは、実に楽しい気分です。

ヨーロッパの友達

交換学生の世話は、相手地区委員長との交換交渉から始まります。委員長になった3年前に、ヨーロッパ圏強化の方針を立てました。

オーストラリアは人口も少なく、キャパシティに限りがある、アメリカも異質な世界だが、ヨーロッパの方が人口が多く、歴史の奥行きがあります。

まず、1988年に、やはり京都経済同友会の調査団に参加して行ったついでに、オランダの委員長に会い、3名づつの交換を約束してきました。

今回は、ＥＣ本部のあるブラッセルへ行くので、ベルギーに絞りました。既に昨年から交換をしていましたので、手紙や電話ではお馴染みだったのですが、ベルギーの委員長に会うのは初めてでした。

あらかじめＦＡＸで6月7日にブラッセルで会いたい、と知らせておき、ロンドンから電話で打ち合わせました。彼－ジャン－アルバート・ムアケンス氏はアントワープに住んでいるのですが、ブラッセルで夕方に会うことにしました。

彼は、三菱自動車のディーラーをしていますので、日本のことは良く知っています。とても陽気な男で、車屋が飲酒運転していいのかいというくらい、カクテルを飲んで、お互いお国と車と、委員会の活動プログラムの自慢話を交わしていました。勿論、2名づつの交換をちゃんと契約しました。

一昨年会ったオランダのディック・コイター委員長は元フィリップスの重役で、悠々自適、青少年交換が仕事という身分です。その時寄越した子は、長崎のオランダ商館長の子孫でした。それなら当時の長崎奉行はと、福知山ロータリーと、福知山市のきもいりで、

ベルギーブラッセルのロータリークラブで

朽木藩のご当主に東京から来て頂いて、お城で子孫同士のご対面を実現しました。

同じ奉仕活動に汗を流す仲間です。おヌシもなかなかやるな、と張り合ったり、助け合ったりしている友達です。

ヨーロッパ圏拡大のポリシーは、われながら先見の明があったと思っています。既にドイツとデンマークも開拓しました。ブダペスト、ワルシャワ、それにモスクワにもロータリークラブが出来たそうです。

しかし、本当はもっと足元の、アジアとの交流をしたいのですが、日本からの希望者がいないのは残念なことです。

コミュニティは民主主義の学校

日本の国際性がかたよっている反面、世界的に共通の現象もあります。

マイナスの問題ですが、家庭での“過保護”はいまや世界的現象です。わがまま、自己中心主義、全くなじもうとしないと、4ケ月でオーストラリアから送り返された子もおれば、3ケ月で強制送還したアメリカの子もいます。

自国での、というより自分の家庭での生活様式から抜け出せないのです。アメリカでもテレビが入らない所があるのです。そういう全く違った生活を体験するのが目的ではないのか、と叱られるのです。

厄介なことは、そういう弱さをもっている子は、学業成績とは必ずしも一致しないことです。学校の成績証明では見抜けません。

そこで両親とともに面接インタビューをします。親離れより、子離れができていない場合の方が多いし、その方が危険です。

民主主義は家庭から始まるし、それはお互いの責任を果たすことだと、痛感しています。

急速に進む日本の高齢化への対策で、老人ホームなど施設づくりの要求がありますが、ヨーロッパではそれはまずかったと、地域社会や家庭で年寄りも子供も一緒に暮らす“ノーマライゼィション”へ回帰しています。

外国の若者達もホストファミリーだけでなく、コミュニティぐるみでホストするべきです。ジェレミー君も町内の地蔵盆や体育祭に参加したり、教会へ連れていってもらったり、娘の同級生の男の子達が、ハイキングや狂言に誘ってくれて、それがとてもよかったといっていました。

京都の町衆とは、地域社会を維持するための役割を果たすことが基礎になっています。

自治の精神がデモクラシーの基本ですし、それは家庭にも通用する原則です。

“活性化”の名の下に地域コミュニティを壊してしまっては、取り返しのつかない、たいへんなツケをつくることになるでしょう。

今年も7月1日の山開きに、富士登山エクスカーションをやりました。地区内に滞在中の生徒26名が参加しました。帰国した日本人生徒も手伝ってくれました。

このエクスカーションも、経験からノウハウを積み上げ、チャレンジ精神を鍛える極めめて印象的なプログラムにしてきました。

安全性など普遍的・原則的な問題を研究して、国内での体制をきちんと整備する地道な努力が“国際化”の基礎であると思います。

富士吉田でのパーティで、生徒代表がデュエットで、お礼の挨拶をしました。素晴らしい日本語のスピーチでした。こころの底からの感動は疲れなど吹き飛ばすものだ、ということを実感しました。

オランダのディックが言っていました。

「ミワさん、これは全くハード・ワーキングだけれど、これほどエンジョィアブルな奉仕はない。それになにより、若返りのヒケツですねっ！」と。　　（みわ　ひろし）

ロッテワールドに見る総合ＳＣの行方

尾　関　利　勝

ここしばらく都市の時代と余暇型社会の到来を背景として、各種の地域開発・都市開発プロジェクトの中で、新たな都市機能の一つとして本格的な都市型アミューズメント機能の多様な展開とその具現化を模索してきた。

折りから、その実例とも言えるロッテワールドが完成し、視察の機会を得たので、そのご紹介がてら、これを下敷きとして、緩和の動きのある大店法との関係から今後の大型総合ショッピングセンター（ＳＣ）と既成商業地の行く末について考えて見た。

1　思い入れあふれるコンセプト型開発

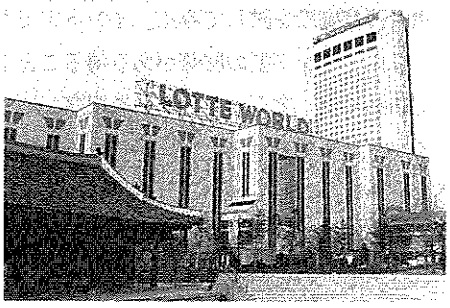
新興住宅地の新規商業開発が出発点

ソウル市は人口約1031万人（1988年）、韓国全土の人口の約 1/4を占める。市の中央を東西に流れる漢江の南岸一帯は、高層住宅を中心とした住宅地として急速に市街化が進んでいる。漢江南岸の東部、オリンピック公園近くの蚕室洞に、地域の商業中心機能を担い6500億ウォン（約1200億円）をかけてロッテワールドがオープンした。元々は他の民間企業が、行政の流通（小売商業）中心としての位置づけのもとに計画を進めていたが事情により、計画はロッテに引き継がれた。ちなみにロッテは韓国で売上高10位の企業である。ロッテワールドは、敷地面積約38,800坪、延床面積約176,000坪の巨大な施設である。

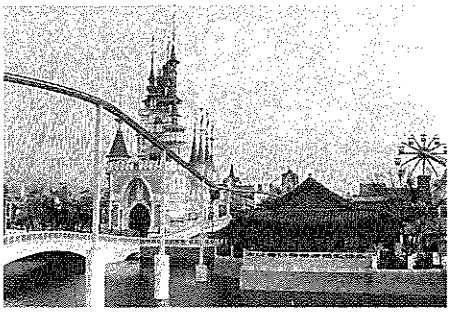
Ｗ・エドモントンで得た基本コンセプト

このようなテーマパーク型複合施設となったのは、元々商業集積の皆無のところで商業中心機能を成立させるために、世界の事例にそのアイデアを求め、ドーム形式全天候型の商業・アミューズメントの複合型大規模施設であるカナダのウエスト・エドモントンのＳＣに出会ったことがきっかけとなったからだそうである。言い替えれば、始めにテーマパークありきではなく、ショッピング・センターの客引き部門として全天候型テーマパークに至ったのがロッテワールド企画のコンセプトのはじまりであった。失礼な言い方かもしれないが「苦肉の策が産んだ知恵」と解釈した。ロッテワールドと言うとテーマパークと思われがちだが、実はその部分はレジャー部門としての一部に過ぎない。しかも屋内テーマパークはそのまた一部ということになっている。ちなみにピーク時の入場者数はＳＣ全体で 250千人／日に対して、テーマパーク部分のアドベンチャーの入場者数25千人／日と

ロッテワールド外観



ロッテワールド　マジックアイランド

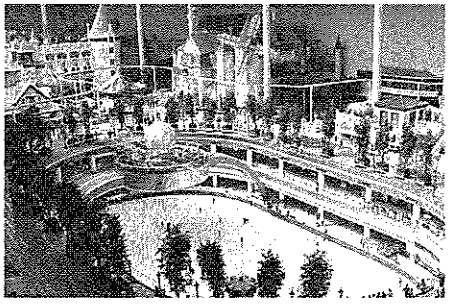


全体の10%に過ぎないと言うことである。（視察時点ではマジックアイランドは未公開のため不明）

感じさせるファミリーへの熱い思い

この施設の最大の特徴は、たとえば、母親が百貨店で買い物をし、子供がアドベンチャーで遊び、父親がスポーツセンターで汗を流すと言うように、一家族がそれぞれの目的に応じたライフスタイルを同時に楽しむ事ができる場であることだろう。もち論、団体観光や若者達の遊びなど家族以外の利用も多いと考えられるものの、原点としてファミリーへのサービスが基本コンセプトとなっていると感じた。開発者サイドによる事業目的や効果について様々な事項が説明されているが、私が感じたコンセプトは、つまるところこの点に尽きる。この発想に至る直接のきっかけは上記のW・エドモントンによるのだが、しかしこのようにコンセプチャルでしかもハイリスクな施設開発の意志決定の陰に、オーナー重光社長の強い意志を思わざるを得なかった。重光社長の故郷韓国と残された家族への熱い重いが、この施設のコンセプトに強く働いていると感じられ、いささか胸に込み上げるものがあった。都心の繁華街のあり方を思い巡らしている私にとって、ロッテワールドのコンセプトと重光社長の思いから、こうした単独の開発に限らず、まちがファミリー型ライフスタイル実現の場を提供することを確信する機会になった。

ロッテワールド　アドベンチャー（内部）



ノーハウはディズニー方式

この計画には、日米をはじめ多様な専門家が参加しており、アドベンチャーの計画にはかってディズニーランドにいたアメリカのコンサルタントが参加している。公開直前の仕上げに入っていたマジックアイランドの工事現場でも何人かのアメリカ人と思しき技術者を見掛けた。このような施設事例がまだ世界に少なく、基本的ノーハウはやはりディズニーランドしかないからである。ここでも施設づくりや運営スタイル、催物、キャラクターのアイデアから従業員の表情に至るまで、ほとんどディズニーのパターンと言って良い。その限りではディズニーランドを越える目新しさは見当たらなかった。

長時間滞在には快適さを欠くドーム

アドベンチャーの入場者は、たまたま土曜だったせいか午前中は少なく、昼を過ぎるころから除々に増えてきた。アイススケートリンクも同様で、午前中はスケーターも少なく閑散としていたが午後になるとスケート教室らしきユニホーム姿の子供達であふれるようになってきた。ヒアリングによると日本人観光客の入場者も多いそうで、特にホテル宿泊客は大半が日本人と言う事である。私達の見たところでは、当日の入場者の大半は韓国人で、民族服を着た高年令者が若者や家族連れよりも目につき、どちらかと言えば地方からの見物客が多いように見受けられた。一通り乗物や観覧施設を試してみた。インドアでもディズニーランド型の展開があり得ることを一応確かめた。アドベンチャーを視察しはじめて3時間ほど過ぎると、同行者一同、少し落ち着かなくなってきた。理由は音である。ガラスドームで閉鎖された空間の中で、各所から音が出ている。また定時になると鳴り物

入りのパレードが練り歩く。様々な音が入り交じり、それぞれの音がそれぞれの場所で主張しあっている。それらの音がミックスされて潜在的な騒音状態になっているから、一たん気にかかり始めるとたまらない。遊び目的と視察目的で感性の違いがあるのかも知れないが、視察者の目、と言うより耳からは3～4時間が滞在の限界であるように思われた。

2　ロッテワールドに見る商業展開の行方

大型店の新たな立地競合が激化する時代

ここにきて、日米構造協議をきっかけに大型店の規制緩和が急速に具体化しはじめた。これまでの大店法施行下でも、在来業態の大型店立地は、ほぼ全国的に一通り行き渡った状況になっている。かっての在来商店街型小売店舗と大型店の競合関係の時代から、既に大型店同士の競合時代に入り、既存大型店のリュニーアルや新業態店舗の展開が始まって久しい。折から大店法の規制緩和によって、大型店の立地規制が弱まることにより、一層大型店同士の立地競合が激化する可能性が高くなると予想される状況になってきた。大店法の規制緩和によって、都市開発や市街地再開発事業などのテンポが、キーテナントとしての大型店の導入のしやすさに結び付くことにより、開発事業の進捗が多少足早になることも考えられる。このことが既存大型店と新規大型店の立地競合をより激化させる状況になろう。

競合戦略としてのコンセプト化・大型化

大型店にとっての競合の中での生き残り戦略は、より大規模化・複合化することによる集客性の強化や、あるいは他にない明確なコンセプトを打ち出すことによる差別性の強化の二者択一あるいはその両方の充足の方向にならざるを得ないものと考えられる。規成市街地での新規立地は大規模工場等の跡地再開発やＪＲのヤード跡地利用による拠点的開発などの場合以外には期待出来ないから、勢い大型化による新規立地は大都市周辺部や郊外の未利用地が選択されることとなる。その場合、集客性を高める観点から、前段であげたロッテワールドに見るように、複合アミューズメント化の方向が時代の流れ、消費者のライフスタイルからくるニーズとして考えられる。いよいよ日本にも本格的な複合アミューズメントを持つ大型ＳＣ時代が加速度的に到来する状況になってきたと考えられる。

今こそ必要な既成市街地の

アューズメント化

このような状況になったとすると、規成市街地の買回り商圏構造が大変動することも、あながち否定出来ないと考えられる。消費者の立場から見れば、集客性に必然性の無い商業地や魅力の乏しい商店街では消費者の支持を失って衰退することが、極論すれば中小商店街はおろか都市の中心商業地でもありうる状況になってきた。これまでの規存商業地の活性化は多かれ少なかれ、その地域の商業集積を高めることや道路環境など公共空間の環境整備が中心で、各種の近代化計画やコミュニティマート構想等でまちづくりの必要性が指摘されていても、なかなか本格的な「まち機能」を造り出すまでには至っていない。既成市街地の商業地が多くの消費者の支持を得て生き残るためには、個別の店舗の枠を超えて、消費者のライフスタイルの実現に貢献しうる本格的なまち機能を充足する事が必要であり、その際、文化性とアミューズメント性が不可欠な要素と考えられる。この点でロッテワールドの展開はまち機能としても、大型店の複合業態のあり方としても、一つの先行きを示したお手本と言えるだろう。

（名古屋事務所長　おぜき　としかつ）

欧州河川港都市の風景

内村雄二

6月の上旬にパリ（フランス）、ロンドン（イギリス）、アムステルダム（オランダ）、アントワープ（ベルギー）等の都市を訪れる機会がありました。今回はこれらの都市について、特にウォーターフロントの様子（風景）といった視点からご紹介したいと思います。

風景が物語るもの

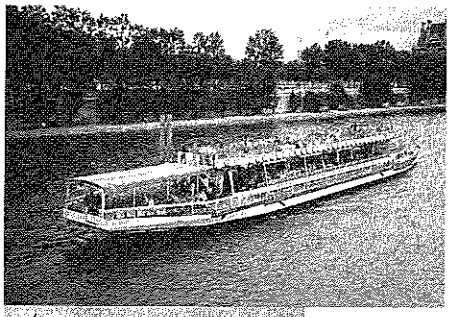
ご存知のとおり、中世から近世への幕開けといえる大航海時代からこれらの都市は栄華を極め、現在に歴史的な社会資本のストックを見ることができます。

多くの植民地を確保し世界市場の基礎を築き、その財を自国へ持ち帰り都市の中で蓄える。その器や象徴である建設物の大半は、当時の荷役の中心であった河川の沿岸や背後地（河川港）に現存していますが、時代的にみてアムステルダム、ロンドン、パリ、アントワープの順序で少し様子（風景）が異なります。端的にいうと、都市の最盛期における富の量に比例したような恰好で、ウォーターフロントのまちができているようです。次表に、かなり主観的に4都市の概況をまとめてみました。

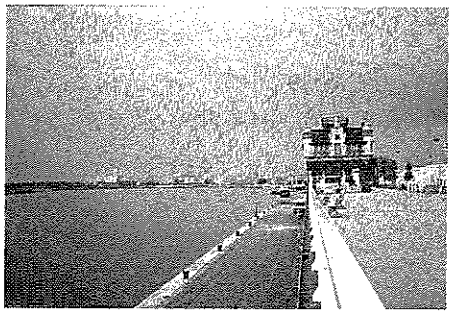
アムステルダム／17世紀初頭からの東インド会社の繁栄を髣髴とさせる風景です。当時の船や交易の規模等から幅員十数mの運河網で機能的には満足したのだと思われます。市街地は非常に密集していますが、建物は中

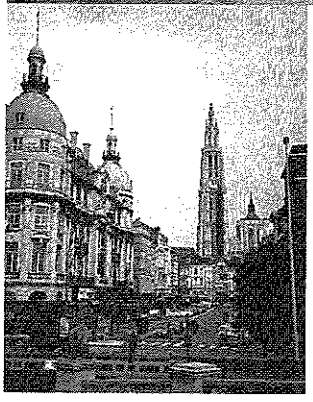
オルセー美術館、水面と陸のレベル差があるが河川敷は歩ける（パリ）

緑豊かなセーヌ川をバトームシューが走る（パリ）



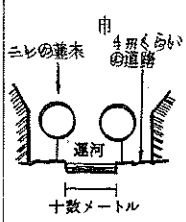
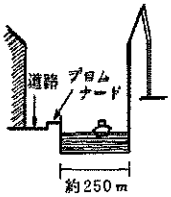
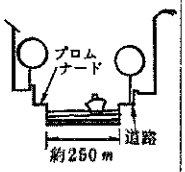
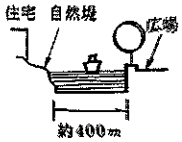
城のような建物（レストラン）の背後に先端的な近代港湾がみえる（アントワープ）





内港の広場からすぐそばに大聖堂と市庁舎がある（昔のままの風景）（アントワープ）

河川港都市（主に内港部）の概況

	アムステルダム	ロンドン	パリ	アントワープ
最盛期	１７世紀～	１８世紀～	１９世紀～	２０世紀～
水域形態	小運河網	テムズ川	セーヌ川	スケルト川
典型的断面イメージ				
ウォーターフロントの印象	中低層の建物が密集、住宅多い ニレの河畔 ヒューマンスケール	水際線に建物が並ぶ（官庁） 水陸が近い 沿岸プロムナード	文化的施設群 プラタナスのプロムナード 物揚・船着場	スポット的な親水空間（広場） 自然景観が豊富な港湾施設
代表的建物	ヘーフェル（切妻）のの町並 王宮　等	ウエストミンスター サウスバンク タワーブリッジ　等	ルーブル、オルセー美術館、エッフェル塔、ノートルダム寺院　等	大聖堂 市庁舎 城（博物館）等
アミューズメント（演出）	運河クルーズ	水上バス 建物ライトアップ	バトームシュー等客船 橋ライトアップ	遊覧船
備考（再開発等）	ジョルダン地区等の住宅リノベーション	ドックランド再開発	マレ地区、セーヌ南東地区再開発	世界最大水門 欧州２位の港勢 （ＥＣ拠点港）

層程度の床で十分だったのかもしれません。なお現在の港湾機能は海側の方へ移動しています。

ロンドン／オランダを凌駕した大英帝国時代の建物が現存します。国際交易と産業革命により、都市の機能、規模ともにアムステルダムの数倍で、本格的な高度利用がみられます。ドックランドの再開発は古いワーフ（倉庫）を住宅等にリノベーション（古いものを活用した再整備）していますが、そのまま使えるほどしっかりした建物です。

パリ／ナポレオンにより大改造された都市だそうですが、ロンドンの直さい的な建物の印象と異なり、丸みをおびた建物が多くやわらかさやぜいたくさを感じさせます（文化系の施設が目立つ）。また、沿岸の緑が豊富な気もします。

アントワープ／ロッテルダムと並ぶ欧州（ＥＣ諸国）の海の玄関です。旧港は、都心と一体で昔（近世）のままのようですが、早い時期に時代を見越し、近代的な港湾整備を行っています。そのコントラストが風景の中に現れています。

歴史の証人を大切にしている風景

経済基盤と社会資本のストックが相応することは、世界共通の話しだと思いますが、おもしろいのはヨーロッパでは石の文化といわれるように、インフラも建物も石造主体のた

ヘーフェルのまちなみ、ヒューマンスケールの運河にニレの木がよく似合う（アムステルダム）

運河クルーズの船溜、中心市街地が直背後にある（アムステルダム）

め往時の姿を今にとどめていることです。ですから、3、4百年くらいの過去（ストック）から現在（フロー）までが共存した博物館的な風景を呈しています。日本の場合は木造中心のまちである上に、戦災やスクラップアンドビルドといった開発手法のために、このような風景は見られません。横浜や神戸で見ることのできる近代建築でもせいぜい1世紀くらいのものですし、港のインフラ整備が埋立によることが多く、原型を残しつつ使われているところは非常に少ないのです。

物理的な側面だけでなく、考え方の点でも異なります。ヨーロッパではリノベーションを基調としており、古いものを非常に大切にしているようです。歴史的な魅力ある風景は、一つ一つのリノベーションの積み重ねによってできあがっているのです。おそらく、今でも中世や近世の頃の風景とそんなに大きく違わないでしょう。ちなみに、一般的に使われるようになったアメニティ（快適性）という言葉の意味も、もともとはこのような保存指向が基本であると聞きました。

我々はどういう風景をつくるのか

やはり趣のある風景は、にわかにはできないようです。

質の高い社会資本の必要性を認識できるようになった我国ですが、今から新しい風景を創る上で黎明にあるところといえそうです。

東京、大阪等で進められている大規模な都市及び港湾整備は、将来どのような風景を創るのでしょうか。リノベーションできるような、それに値するようなものができるとよいのですが……。個々の施設デザインを重視するとともに、全体的な景観づくりのなかで施設のあり方（アーバンデザイン）を考えることが不可欠だと思います。

いずれにせよ、世界各国から稼いだ莫大なお金を大切に使って、歴史に残る良い風景を創らなくてはいけません。

（大阪事務所　うちむら　ゆうじ）

リノベーション中のワーフ、住宅に変えている（ロンドン）

テムズ川のプロムナード、セーヌ川に比べ水面が近い（ロンドン）

チェンマイを旅して

小竹暢隆

5月にタイを訪れる機会を得た。チェンマイでの会議に参加するのが目的であったが、バンコク～チェンマイ間は現地のブローカーが座席を押さえてしまって、航空会社のコンピューターが動かせないということで、間際までスケジュールが確定しなかった。

チェンマイへの直行便が取れず、途中ピサヌロークでプロペラ機に乗り継ぎ、更にタークとミャンマー国境のメー・ソットというところの二カ所に立ち寄って、漸くチェンマイに辿り着いた。チェンマイはバンコクの北へ約 790kmの所に位置しているが、直行便で1時間あまりのところを4時間以上を費やした。我々が日本からバンコクまで行ったのは、たまたまインド航空であったが、タイ航空で行ったグループはチェンマイへの直行便の座席を優先的に確保してくれたという。

因みに空から見たタイ国土は大半が平原で水田が多く、また蛇行する川に沿って集落が形成されている。ミャンマー国境に向かっては山岳地帯であるが老年期地形であった。

チェンマイでの行事

チェンマイではリンカムホテルというところに泊まった。街の中心からは多少はずれているが、高級とはいえないにしても滞在型のいいホテルである。会議のヘッドクォーターがプラザホテルというところであり、そこへはやや距離があるが、何よりも解放感がある。

開会式はチェンマイ大学で行われた。1965年設立というが、大学があるというのはやはり地方の中核都市であることを意味しているのであろう。

式は、役員の紹介から始まった。一人ずつナウンスされて壇上に出てくるわけであるが、韓国の役員が紹介されたときには韓国のメンバー全員が総立ちになり割れんばかりの喚声で迎えられた。会場には何台ものバスで乗りつけており、台頭する韓国パワーをここでも感じられた。

夜は台湾の女性実業家グループとの姉妹提携に向けての交流会である。このような会は殆どが中華料理で設営されていた。我々（名古屋ＪＣ）が先方の代表5人を招待したわけであるが、一人ひとり紹介され、当然中国語であいさつがあった。こちらは70人であるが、中国語を話せるメンバーがいるのはさすがである。当然、司会兼通訳となっている。ただ会食の時は先方は英語が全くできないとのことで、筆談だけがたよりであったという。

閉会は万歳三唱であったが、極めて日常的な日本人の万歳は外国人から見るとどのように写るのだろうか。

市内めぐり

自由時間は一日だけであった。同じグループの連中がゴルフに行くということであったが、タイとゴルフの関係を見出だすことができず、一人で出掛けることにした。

まずホテル出入りのタクシードライバーと交渉して1時間10Ｂ（約 600円）の単価で市内めぐりに出発した。

13～14世紀のワット（仏教寺院）をいくつか回ったが、ワット・チェディルアンなどはいかにも崩れそうな恰好をしている。アンコール・ワットの破壊も著しいと聞くが、途上国の文化の保全に対する協力は、長い目で見た場合、資金を出すだけのＯＤＡよりも評価

されるのではないか。

高級デパートもあるが、一流ブランド商品が並べられているだけで、あまり特筆すべきものはなさそうである。かえって大衆マーケットの方が面白い。日本人を相手にしていないだけに、価格も現地の相場で、ファッションジーンズらしきものも 500円前後であるから、掘り出し物を探すのも一つであろう。

運転手に任せると土産物店のはしごをさせられた。銀製品に始まり、傘、タイシルク、木彫り製品、皮製品などの店へ連れて行かれた。あまり購買意欲をそそるものはなかったが、義理で多少お付き合いした。バックリベートを期待していたかもしれないが、運転手には悪いことをした。

他に交通の手段がないので、乗り合いのものも含めてタクシーにはかなり乗ったが、決まって「女性はどうか」といった誘いがあった。

国際的知名度

タクシーで回った限りにおいて、これといった産業がまだない中で観光産業がしたたかに根付いているようである。工業出荷額といった統計に現れる部分以外の割合がかなり大きいのではないか。

チェンマイの人口は15万程度であり、約600 万のバンコクは別格として、二位のコーラート（東北部）の約20万に続くタイ第三位の都市である。航空が有力な交通手段である背景には、他の交通インフラの整備が遅れているためもある。実際、今回経由で立ち寄ったいくつかの空港は地方都市の鉄道駅のようなものであり、空を利用する方が点と点を結ぶ手段としてかえって安上がりということはすぐ理解できる。チェンマイにもなるとバンコクからの直行便だけで1日平均7便近くあり、 790kmという距離はあまり感じさせないものであろう。

チェンマイの仏教寺院

今年に入って、フランス、韓国、タイと旅する機会を得たが、大都市名古屋を知っている人に巡り合うことができなかった。トヨタの近くという説明は未だに有効である。その意味で外国の地方都市が国際的に名前が知られているのには考えさせられる面がある。チェンマイの場合はややnotorious なイメージがあるが、いずれ変化していくであろうし、またそのような活力が感じられた。

21世紀を待たずしてビジターズ・インダストリー市場が飛躍的に増大するといわれる。観光産業もその代表例であるが、より広義にとらえたものである。訪ねられることにより派生する多様なビジネスが展開されることが予測される。

経済的には確固たる存在になった日本は、これからは国レベルから都市や地域のレベルに国際化の重心が移行していく方向にある。その意味で国際的な知名度が求められるとともに、結果として地域の活性化につながるものと考えられる。

（名古屋事務所　おだけ　のぶたか）

第１３回全国町並みゼミ京都大会を終えて

石本　幸良

去る６月２３日～２５日の３日間、京都におきまして、第１３回全国町並みゼミ京都大会が開催されました。全国各地で町並み保存運動に取り組む住民を中心に、研究者、自治体関係者など、６８団体、約６００人が参加いたしまた。今回の「京都ゼミ」では大都市における歴史的町並みの保存問題に焦点が当てられ、歴史都市京都の町家や町並みが置かれている危機的状況について討議が重ねられました。

近年の地価高騰に伴う土地投機の中で、京都の歴史的町並みやそこに生きる人々のくらし、そして文化が危機に瀕しております。効率的な土地利用の名目での安易な建替や高層化が、長年市民に守られ人々に親しまれてきた京都の景観を一変しようとしております。

この約１年間ゼミ開催に向け、事務局として多くの方々のご支援を頂きながら、準備を続けてきました。その間、京都に対する市民の方ばかりでなく、全国の方々からも多くの京都への熱き思いが寄せられました。

今回のゼミを契機として、京都の歴史的環境をどう守りながら、どう再生していくか、さらには２１世紀に向けての京都像についてゼミにご協力頂いた方々とともに、考えていきたいと思います。

なお、３日間の熱心な討議の成果は大会宣言及び伝建、都心、伏見分科会アピールにまとめられ、現在、各方面への要望書提出を行っております。また、ゼミ報告書も現在作成中ですから、ご関心のある方はご連絡ください。　（京都事務所　いしもと　ゆきよし）

オートキャンプ体験記

中村　孝子

７月に石川県の手取渓谷へ大阪事務所所員と、オートキャンプに行ってきました。

オートキャンプとは、車を使ってのキャンピングのことで、最近ではオートキャンプ用のバン等の普及によりますますブームになりつつあります。

手取川は、白山に水源をもつ石川県最大の河川で、高さ20～30mの渓谷が続いています。私たちは、渓谷沿いの綿ヶ滝いこいの森キャンプ場を中心に、温泉、カヌー、森林浴を楽しみました。キャンプ場はかなり整備が整っていてなかなか快適でした。

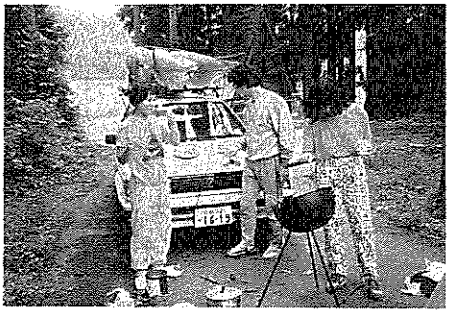
自分の視界におさまりきらない空間、滝の下をカヌーで横切る緊張感、ひんやりとした霧雨など感動的な体験の連続でした。森の中では、小さいけれども生命体がいっぱいで、久し振りに森林浴が楽しめました。まさに、オート・キャンプの醍醐味といえます。

白山麓ではこの他に、バードウオッチングやハングライダー、冬はスキーなどができ、今回は味わえませんでしたが、加賀の菊酒、白山堅豆腐や山菜・川魚料理など白山麓ならではの味覚も楽しめるそうです。

今、オートキャンプがおもしろい。

（京都事務所　なかむら　たかこ）

今、オートキャンプがおもしろい



土木技術者女性の会について

福岡　雅子

近ごろ、女性の社会進出だとかが取りざたされています。土木の世界にも女性が増えています。もともと男性中心の職業であった土木の仕事ですが、近ごろの機械化、省力化や企画や技術開発等のソフト面の仕事が増えたことなど、女性が参加しやすい状況になっています。

そのような土木の世界の女性が、少しでも自分達の足場を固め、社会への還元を行うために「土木技術者女性の会」という組織をつくっています。会員は現在71名で、まだまだ増える勢いが衰えません。

さて、この土木技術者女性の会の総会及び見学会が去る6月22日と23日に行われました。見学会は、富士山の西斜面にある大沢川が絶えず崩壊を起こしている大沢崩れの源頭部の崩壊と峡谷部で行われている対策工事の見学でした。現場は富士山の5合目から往復4時間程度で、崩壊現場はかなりきつい斜面ですが、そこは仕事で鍛えた体力で参加者全員いとも簡単に登れました。日本で一番高い所での土木工事の非常な困難さをまのあたりにして、一同あらためて生活を守ることの難しさと大切さを思いました。

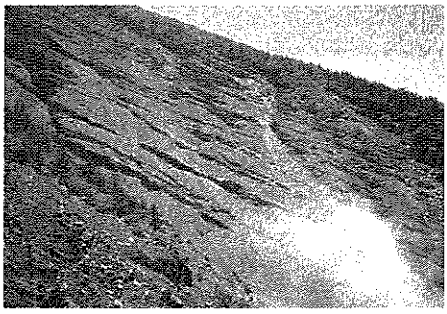
見学会に先だって行われた総会では、女性であるためにできることやできないことなど、日頃出会うことがほとんどない女性技術者同士、いつまでも話が尽きません。

世間では女性土木技術者というのはまだ特殊な人種と見られているようで、マスコミの取材などもありました。そこで、一日もはやく実力をつけ、まちづくりなどは女性が参加するのが当たり前という世の中にしようと決意を新たにした次第です。

（大阪事務所　ふくおか　まさこ）

大沢崩れ崩壊軽減対策調査工事現場での記念撮影

崩壊を続ける大沢崩れの斜面



大阪事務所パーティーについて

大阪事務所長　杉原　五郎

さる7月7日(土)に大阪事務所の移転披露パーティーを開催しましたところ、200 名を越える多数の方々のご参加をいただきました。ＯＢＰにある新事務所を活用した手づくりの披露パーティーのため、いろいろと行き届かぬ点があったものと恐縮している次第です。披露パーティーに際して、多くの方々からアルパックに対する期待や注文をいただきましたが、これらを真摯に受けとめて新たな時代の要請に対応しうる事務所づくりに邁進したいと考えております。今後とも、ご指導とご鞭撻のほどよろしくお願い申しあげます。　（すぎはら　ごろう）

新刊旧刊書評紹介

岩波書店
(てるおか いつこ)
暉峻 淑子著

『豊かさとは何か』

1989年9月第1刷発行　1989年12月第6刷発行　　紹介　松本　明

「リゾートブーム」に端を発して、プランニングの世界でも「豊かな生活」という言葉が脚光を浴びつつあります。このところ「国際化」、「情報化」、「高齢化」、「ソフト化」などがレポートの序文を飾る主要なキィワードだったのですが、最近では「豊かな生活」がそれらに仲間入りしたわけです。

ところでプランナーは、「豊かな生活」を計画しようにも多様な国民諸階層の生活実態や問題、ニーズなどについて、あまり十分な知識を持ち合わせていないのが現状です。そのことも手伝って、「豊かな生活」のキィワードに基づくプランも画一的なものとなりがちで、例えばリゾート開発においては、施設内容や利用者像がステレオタイプ化しています。昨今のリゾート開発の基本が不動産経営にあるとはいえ、「豊かな生活」のイメージが不足していることも一因でしょう。

さて、本書はタイトルのとおり、まさにこの「豊かさ」のあり方を鋭く問いかけたものとなっています。まず、西ドイツを例にとって、そこでの豊かな国民生活の姿を、労働時間、福祉、教育、住宅や環境など、多様な側面から具体的に示しています。社会的に獲得され国民的に合意された「豊かな生活」の質の高さには目を見張るばかりで、非常に興味深く読んだ点です。また、本文中には西ドイツの学生、主婦、高齢者、子どもたち等々の生の声が多数紹介されており、それらもこの本の魅力の一つとなっていると思います。

また一方では、日本の「ゆとりをいけにえにした豊かさ」の実像と問題点を鋭くえぐり出しています。特に、「豊かな生活」の基礎をなすべき生活時間や健康の問題について詳しい分析がなされています。西ドイツと比較して平均 500時間も長い（通勤時間を除く）わが国の労働時間を前提にしたとき、「豊かな生活」に関するプランニングにも大きな限界があると実感せざるを得ませんでした。

本書は、発行からたった2カ月半で6刷を重ねるほどのベストセラーとなり、とりわけ若い人々によく読まれているそうです。このことは今日「豊かさ」の実感がないことの裏返しでもあるでしょう。そういう意味でこの本は、「豊かさとは何か」を具体的に考えさせてくれる優れた本だと感じました。

（京都事務所　まつもと　あきら）

編集部より

○お気づきの方もおられると思いますが、前号より「特集」的な扱いを始めています。今月号では「今、日本の外では」ということで所員の海外での体験や取材を中心とした記事内容としてみました。

○次号では「都会と田舎」をテーマに特集を組む予定です。今後、特集を組む際に何かおもしろいテーマがあれば御一報下さい。

○これまで、手作業で行っていた編集ですが今回からはワープロ編集に切り替えました。将来はパソコン通信なども用いて効率化していこうと考えています。今後とも紙面の刷新、効率化を進めながら、「足でかせいだ新鮮な情報」をお届できるよう編集部員一同がんばっていきたいと考えております。　（い）

まちかど

グランアルシェ

三輪　泰司

まちかど、というにはちょっと大きいですが、パリはラ・デファンスのグランアルシェです。

まず、驚かされるのは、人工地盤です。セーヌ川からアルシェまで、徐々に上がって行く地上部はすべて歩行者専用で、この地下に駐車場、バスターミナル、鉄道駅そして道路が入っています。

東京の新宿副都心や大阪のＯＢＰと比べて都市基盤－公共空間について、規模の問題ではなく、思想の差を感じさせられます。

このアーチ、風通しの良すぎることは確かで、強化ガラスの衝立をいっぱい立てて、テントのような地下入口の屋根が、吹き飛ばされないようにしていました。

全体が都市のオブジェですが、万事の荒っぽさはどうでしょうか。

正面階段の上にある建築家のメッセージが９ケ国語で彫ってあるあたりも、フランスとパリの姿勢を見るようです。

以下その日本語・英語・フランス語を。

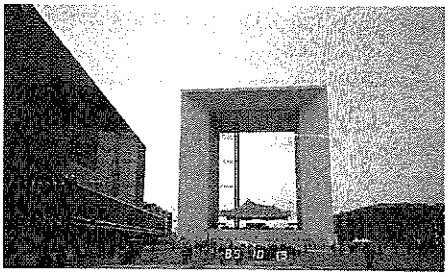
世界に開かれた窓
将来　人々が自由に
会うことの出来る希望の　シンボル

Idea, an open cube,
A window to the world,
Symbol of hope for
the future, that all men can meet freely,

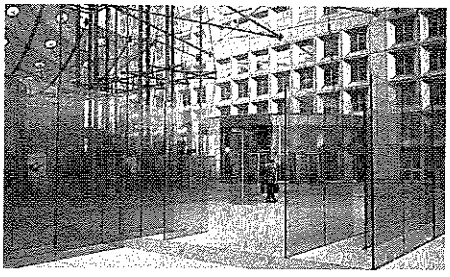
Idee Un Cube Ourert,
Une Fenetre sur le Monde,
Un Symbole de l'espoir, que dans le Futur,
Les hommes Pourront se Recontrer librement

Johan Ottovon Spreckelgen 1983
（代表取締役会長　みわ　ひろし）

パリのグランアルシェ（ラ・デファンス）



グランアルシェの下層部分



アルパック　㈱地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社 京都事務所	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 （大和銀行京都ビル８階）	TEL（075）221－5132(代) FAX（075）256－1764
大阪事務所	〒540	大阪市中央区城見１－４－70 （住友生命ＯＢＰプラザビル15階）	TEL（06）942－5732(代) FAX（06）941－7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内３丁目18番30号 （ツボウチビル２階）	TEL（052）962－1224(代) FAX（052）962－1225
東京事務所	〒160	東京都新宿区新宿２－５－16 （霞ビル401号）	TEL（03）226－9130(代) FAX（03）226－9560
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神１丁目15番１号 （日之出ビル６階）	TEL（092）731－7671(代) FAX（092）731－7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540	大阪市中央区石町１丁目１番１号 （天満橋千代田ビル２号館９階）	TEL（06）943－7016 FAX（06）943－7026
㈱都市居住文化研究所	〒604	京都市中京区御池通東洞院東南角 （京ビル４階）	TEL（075）252－2231 FAX（075）252－2282